
ミエルミライ

シュンくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミエルミライ

【Nコード】

N0750Q

【作者名】

シュンくん

【あらすじ】

未来の見える男の子の物語

オープニング

不思議な映像だ

見ていてると、気分が悪い

初めて見た時は何を見ているかわからなかった

今ならはつきりわかる

僕が少しだけ先を見ていることを

1「オープニング」

—— 目を覚ませば、天井がある。

初めて見る天井。僕の家とは違う、真っ白な天井。横を見れば、花瓶に一輪の花がささってあった。

名前は分からないけれど、白くて小さい花だ。

僕はどうやらベッドの上で寝ていたようだった。

僕は白い服を着ていた。パジャマみたいな服。

ベッドの下を見てみると緑色のスリッパが置いてあった。

僕はスリッパを履いて、扉の前に立って扉を開けようとする。

扉は押しても引いても開かない。

僕は仕方がないからベッドに戻った。

ベッドの上から窓を覗き込んだ。

とても広い風景だった。

車がとても小さく見えた。

遠くに山が見える。

この部屋はとても高い場所にあることが分かった。
それで僕はどうしてココにいるのか考えた。

・・・思い出せなかった。

しばらくすると白い服を着た女の人がドアを横に開いた。

僕はそのとき、なんとなく恥ずかしくなった。

扉を開けた女の人は、僕を見ると驚いた顔をして走っていった。

さっきの女の人が大きい声で何か言っているようだ。

程なくして3人の女の人がやってきた。

さっきの人が連れてきたようだった

一番先頭の二十歳前後の女の人が僕に

「初めまして、江ノ森君」

と自己紹介を始めた。

「私は三神です」

と言った。

「君は交通事故で頭を強く打ち付けて、4日間寝込んでたんだ」

と言った。

「ココはどこですか」

分かりきった事を確認のため聞いた。

「ここは、病院だ。そして、私はココの医師でもあり、君の担当だ」

と三神先生は言った。

見た目は若いけど凜としていて、いかにも医者って感じだった。

「事故以前の記憶はあるのか」

「・・・分かりません・・・」

本当に僕はこの時思い出せなかった。

確かに頭には白い包帯が巻いてある。

「たぶん事故の後遺症だろう。しばらくは入院する必要があるだろう」
だ

そういつて三神先生は看護婦さんに何かを告げて、

「じゃあ江ノ森君、今日はここまでにしておこう。」

そういうと三神先生は看護婦さんに

「では浅上さん、お願いしますね」

そういうと三神先生は部屋を出て行き、浅上という名前の看護婦さんが残った。

「江ノ森君、三神先生って恐いでしょう」

と浅上さんが笑いながら言った。浅上さんは黒髪に背中まで届くような長髪で、笑顔がとても素敵な人だった。

三神先生と比べるとずっと話しやすそうな人だった。

「私は浅上唯です。江ノ森君の周りで困ったことがあったら私に言っ
てね」

と言った。

少しだけ話してみると、どうやら浅上さんは僕のお父さんと知り合いらしい。

病院の偉い人とも知り合いらしく、僕をこの病院に任せたらしい。

「江ノ森君、4日間は点滴ばかりで食事してなかったからね。丁度
昼食の時間だから今から持ってくるね」

と言って浅上先生は昼食を取りに行った。

僕はベッドに横になった。

突然色々な事を言われて疲れてしまった。

目を閉じると、そのまま意識が落ちていく、

白い衣の女の子。

分かれて歩けば見知らぬ少年。

入れ違いに女の子。

分かれて僕は一人だけ。

オープニング（後書き）

お読みいただいております。ありがとうございました。

なにか、御意見ご感想があれば是非お願いします。

江ノ森信介

——目を覚ませば、天井がある。
慣れ親しんだ、俺の部屋の天井だ。

「ん…」

布団から這うように出て、時計を見る。

『7:30』と無機質なデジタル表示がされてあった。
(そろそろ起きないとまずいか)

時計には11月11日と表示されてあった

1が並んだからといって特別な日でもない。

ベッドから体を起こし、電灯を点ける。

外は明るくて、目を細めてしまう。

部屋を出て、階段を下りる。

洗面台で顔を洗う、寝ぼけた頭が少しはマシになった。

リビングを覗けば誰もいない、親父は先に出たようだ。

部屋に戻って、ハンガーに掛けてあった制服に着替える。

もう季節も秋なので夏服はタンスにしまっており、今は冬服だ。

軽いカバンと携帯と財布を持って、鍵を掛けて家を出る。

コンビニで朝食代わりのおにぎりと昼飯用の弁当とお茶を買って、
おにぎりを食べながら学校へと向かう。

コンビニから学校に向かう途中に不思議な少年がこちらを向いて
笑ってた。

校門をくぐり、靴を履き替え、階段を上がり、教室へと到着。
「おはよう、信介君」と白露黒霧

「おはよう、江ノ森」と皆川迷彩
コレが俺の友達しじきの白霧黒霧くろむと皆川潤みながわ じゅん。

潤とは小学校、黒夢とは中学校からの仲だ。

黒霧は俺と変わらない体格で、髪は名に沿って白と黒の混合。白髪じゃなくて、染めてるそうだ。見た目は中性的な顔つきで髪を伸ばせば、女子かと間違えるほどの容姿だ。中学の卒業式の打ち上げで、冗談で女装させたが、冗談にならなかった。

潤は俺より少しだけ背が高い。茶髪でいつも首にチョーカーをつけている。潤のチョーカーは日によってスカルだったりブランドのロゴだったり十字架だったり種類は様々だ。家には三桁にのぼるコレクションがある。

今日はスカルが三つ連なっているデザインだ。それは俺が今年の誕生日に潤に送ったはずの物だ。

「今日の一限って何だっけ」と聞いた。

「ああ、現国だよ」答えたのは黒霧だ。

「ついでに言っておくと二限目は数学だ」と潤が付け加えてくれた。俺は基本数学ができない、他は赤点をとらない程度の成績だが数学は低空飛行真つ最中だ。

「おはよう」

小柄な女の子が話しかけてきた。初対面じゃない、むしろよく会う、それどころか毎日のように顔をあわせる。

「ああ、おはよう」

水城凜みずき りん、十年以上の付き合いだ。水色の髪にヘアバンド。陸上部に所属していて1年のエースでこのまま行けば部長は確実だそうだ。俺の学校は体育会系の部活動、特に陸上に力を入れている。その部での部長候補なんだから大したもんだ。

挨拶を交わしていると担任の竹内が来た。角刈りでメガネを掛けた先生だ。

ホームルームが始まり、担任の話をボーっとしながら聞いていた。聞くだけで頭には入ってない。

一限目の現国は半分も聞かずに寝てしまい、2限目の数学も同様、3、4限目は言うまでもない。

昼休みには朝買ったコンビニ弁当を食べながら、潤達と過ごした。5、6限は昼食後の眠気に敗北を喫した。

掃除も終わり担任の話も終わり今は放課後だ。

「なあ江ノ森、このあと暇か？」

遠藤が話しかけてきた。いつも通り遊びの誘いだらう

「ああ、今日は病院にいくことになってるんだ」

俺は別に病弱というわけではないが、頭痛持ちで朝は頭痛をすることがよくある。

そのため薬が切れたりしたら薬をもらいに行く。毎週木曜日にな

「分かった、じゃあまた明日な」

「おう、また明日な」

潤とはそこで別れた。おそらくこの後は黒霧と遊びに行くんだらう。

ココが俺がよく行く病院だ、外壁は白でガラスが多く見える。患者が壁を意識しないようにという病院側の処置だ。中に入ればすごく広い、ちょっとした公園ぐらいの中庭がある程度に広い。

別に薬を買うだけなら薬局に行けばいいんだが、別けあって通っている。

その訳と言うのが友達の前藤や相川にも言っていない、この不思議な、いわば能力のせいだ。

人は眠っていれば夢を見る。それは俺だっておんなじだ、でも俺の夢は普通の夢ではない。

一言で言えば未来が見える。

これは小四のときに気付いた。

その夢を今でも覚えている。

忘れるはずがない。

おふくろが死んだ夢を見た。

俺が車に轢かれそうになったのをおふくろが助けてくれた。

それが現実になった。

それ以来おれはこの病院に通っている。

目の前で母親が死んだのを見た俺はショックを受けていてしばらく病院に入院していた。

朝は小鳥を見た。枝の上にとまっていた。

昼には中庭で小鳥を見た。小鳥は疲れていたのか、土の上で眠っていた。

夕方になれば起きると思った。

夕方に覗いてみると、まだ寝ていた。よほど疲れていたのだろう。

翌日になつたら小鳥はいなかった。

また、あの小鳥に会えるかな。

江ノ森信介（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

なにかご意見ご感想があれば、ぜひコメントをお願いします。

浅上晶

病院特有の薬の匂いがしていた。

受付を済ませ、呼ばれるのを待っていた。

俺の周りには、足を包帯で巻いている人、腕を包帯で巻いている人、売店でアイスクリームを覗き込む少女、本を読んでいる大学生っぽい人、受付に呼ばれて立ち上がる人。

たくさんの方がいた。

そして、俺の隣に座る少女。

「久しぶりね、江ノ森君」

「ああ、一週間ぶりだな晶」

晶は柔らかに笑った。

「今日も診察？大変ね」

「そうでもないさ、お前はどんなのさ、病院にずっといて退屈じゃないか？」

「もう慣れたわ、それに、病院でも色々な事はできるわ」

彼女はそう言う。

彼女は浅上晶、この病院の入院患者だ。

「晶、後で外に出てみないか？」

俺は、なんとなく言ってみた。

「いいわよ、中庭ぐらいしかいけないでしょうけど」

「なら後で行こうか」

そこで受付から俺の名前が呼ばれた。

「じゃあ、ここで待ってるよ、後で迎えに来るから」

「ええ、分かったわ」

俺は立ち上がり、受付に向かう。

受付で二階に向かうよう言われた。

ここの病院は十階建てだ。一階はリハビリテーションや公園、売店、救急患者の手術室といったものがある階、二階は外科や内科等、診察をする場所だ。三階から九階が入院患者の階。十階はよく分からないが俺の主治医が言うには会議室等があるらしい。

俺の主治医は

「どうせ、ろくでもない話でもしているんだろうけど」と笑いながら言った。

「久しぶりだね江ノ森君、元気にしてたかい」

「まあ、風邪も引いてないんだから元気なんだろうな」

彼女は俺の主治医の三神加奈、外見は一見、二十歳に見えるが実年齢は二十九。あと四ヶ月もすれば三十路だ。座っていて分かりにくいが、女性にしては長身だ。俺は身長が174cmだが、俺と肩が並ぶ程度には高い。

「どう、夢は今でも見てる」

「ああ、昨日と一昨日は見たが、今日は見ない日だったな」

これはいつものやり取りだ。

「そう、じゃあいつも通り質問するから、それに答えてね」

「ああ、分かった」

三神はカルテのようなものを手に持ち、質問する。

質問の内容は、一週間問題は無かったか、どんな夢を見たか、だれにもバレなかったか等だ。

俺の能力を知っているのは主治医の三神、親父、それにさっきの晶だけだ。

「分かったわ、今週も以上なしね。来週もまた来てちょうだい」

「ああ、また来週な」

適当に礼を言って、部屋を出る。

診察を終えて、晶のいるところへ戻ると

「あら、早かったわね」

晶はいつものように笑みを向けてくれた。

「診察といたって、質問されてそれに答えるだけだからな」

俺はそう答えて

「じゃあ、行こうか」

と言

「そうですね」

と晶は答えた。

晶は中庭の方を向き、俺は彼女の横に立った。

晶は座ったまま中庭に向かい、俺が晶を押しながら言った

「あとどれ位だった？」

「何がですか？」

「足だよ、もう随分経つんだろ？」

「ええ、後二ヶ月だそうです」

晶は足を骨折している。単なる交通事故、だそうです。

晶はすでに三カ月入院している。最初の一カ月は自分一人では動くことすらできなかったと、晶は教えてくれた。

足以外はほぼ完治だそうです。学校には行けず出席日数の関係で今年の進級はできないことになったそうです。

体力が衰えており、親の意向で、全治するまでは入院させたままにしておくそうだ。

「治った後はどうするんだ、来年から学校に行くのか？」

晶は少し考えながら

「いいえ、まだ決めてはいません」

そう答えた。

「あなたはもう一度、二年生をする可能性があるから心配ですね」
おそらく俺の成績を言いたいのだろう

「そのときはお前ともう一回、二年生をしてもいいかもな」
お互い笑いながら、中庭を目指す。

晶と出会ったのは一ヶ月前だ。

いつもどおり病院に行く木曜日。

その日は夢を見た。

病院の夢だ。

中庭で少女が空を見上げている。

少女の瞳に映る空の景色は、病院の外壁に切り取られていた。

絵の中の世界に入りたいと願うような、彼女の姿が儚く、美しい
と思ってしまうた。

俺は夢と同じ中庭で、車椅子に座った彼女を見つけた。

俺は彼女と話してみたいと思った。

「何、見てるんだ？」

「…、空を見ています」

彼女は振り返らずに、答えた。

「空に何かあるのか」

俺は思った言葉を口にした。

「行ったことはありませんから、何かあるかはわかりません」

彼女はこちらを見て、微笑みかけてくれた。

「初めまして、浅上晶です」

彼女は自ら名乗ってくれた。

俺はどうすればいいか分からず

「初めまして、江ノ森信介です」

と、こちらにも名乗り返した。

彼女は、江ノ森君ですね、と呟き

「江ノ森君は、空に何があると思いますか」
と言った。

秋風に乗った木の葉の舞う、病院の中庭。
これが晶と俺の最初の出会いだ。

浅上晶

「江ノ森君、ここで止めてくれるかしら」

「ああ」

俺は晶の乗っている車椅子を止めて、あたりを見回した。

中庭は、季節は秋も中ごろを過ぎたせいか、少し寒く感じた。遠くには人がいるようだが、晶は人目がないほうが落ち着くため、ここを選んだようだ。

「江ノ森君、学校はちゃんといつてますか」

晶は、前置き無くそう言った。

俺の成績は先のも述べたとおりだが、サボることもよくある。そのため成績だけでなく、単位も少し危なかったりする。

そのことを、つい口を滑らせてしまい、晶に言ってしまった。それ以来、時折、学校や俺の成績の話題が挙がることもある。

「ああ、今日はちゃんと行ったぞ」

そう言った。

行ったには行ったが、ただ行ったただけだ。

「そつ、なら良かったわ」

晶はそう言つて、空を見上げた。

茂る木の葉の間から除く空は、目前に冬を控えているためか、早くも空は茜色に染まっていた。

「夢は今でも見えていますか」

彼女は、そう言った。

「ああ、昨日と一昨日は見たが、今日は見ない日だったな」

三神に対してと同じ返事をした。

別に適当に答えたわけではない。他の答え方が浮かばなかったただけだ。

「そつ」

彼女はそう答えたあと

「私は見たよ、君の夢」

晶は後ろに立つ俺の顔を見上げるように笑った。
俺は少し顔が熱くなるように感じた。

「こつやつて二人で歩く夢」

晶は俺の顔が面白いのか、クスクス笑う。

「俺も見るよ晶の夢」

話を変えるためそう言った

「それはどっちの夢ですか」

彼女はクスクスと笑って隣の俺の顔を覗き込む。

「幻想の夢だよ」

俺が幻想の夢と言うときは現実とは違う夢だ。これを名付けたのは三神だ。

三神が「幻想と現実の対比を表していていいじゃないか」とそんな調子で言いやがった。

それ以来そういうふうに使分けっている

「どんな夢だったのかしら」

「中庭でうたた寝している夢かな」

俺の夢の中の晶は、車椅子の上で、目を閉じて少し首を傾けて、木漏れ日を浴びていた。

「とてもきれいな夢だったよ」

誰が見てもそう思うような夢だった。

晶は、「君の目には、私がそのように見えてるんですね」と言った。

俺は答えずに晶を捕まえた。

「そろそろ時間だろ、戻るぞ」

面会時間はもう終わりだ。

「次に会えるのは来週の木曜日ですね」

「ああ」

晶は問い、俺は答える。

晶の顔は少し悲哀の色が浮かぶ。

俺は思わず「日曜は暇か」と聞いてしまった

「ええ、入院中は検診が無ければ何もすることがありませんから」
「なら日曜に遊びに来るけどいいかな」

俺は言うだけ言ってみた。

「はい、もちろんですよ」

晶の顔は悲哀から歓喜に移っていた。

「では、そのときに甘い物を持ってきていただけませんか」

「ああ、分かった」

俺は晶を病室に送り届けると面会時間を10分越えて病院を出た。

水城凜

俺が呆けていると

「信介？なにしてんの？」

と、おれの顔を覗き込むように尋ねてきたやつが居た。凜だ。

「別に、見知らぬ子供に話しかけられてただけさ」

「もしかして、迷子？」

「いや、そんなんじゃないかった」

「そっか」

…沈黙…

気まずい空気払拭するため、

「今、部活帰りか」

と、なんと気なしに言ってみた。

「そうよ、お母さんから買い物頼まれてるの。だからちょっと、スーパーに寄ってる途中」

「そうか」

…再び沈黙…

そして

「今、暇でしょ？ちよつと付き合ってよ」

と言い出した。

何かと思えば、買い物荷物の持ち運びに付き合え、とのことだった。

凜は学生鞆とスポーツバッグを持っており、これ以上荷物を持たせるのも酷だと思い幼馴染のよしみで手伝ってやることにした。

「いいぜ、付き合ってやるよ」

ココから徒歩4分程先のスーパー。「漆原店」を訪れた。

「で、何を買ったんだ？」

「えーっと、ちよつと待ってね」

そついうと、凜はポケットから紙切れを一枚取り出した。どうや

ら、買い物リストみたいだ。

凜の取り出したメモを覗いてみると、明らかにカレーの具材リストだ。たまねぎ、にんじん、カレー粉等々。それと、お菓子。

お菓子はきつと、凜の弟の貴志君の要望のものだろう。

「あ、そうだ。今日の晩御飯はウチで食べない？」

「え？」

中学の頃は時々、凜のところでご飯をご馳走になったこともある。高校に入ってから、凜の家を一度も訪れてなかった。さすがに高校に入ってからには気恥ずかしくもあつたし、特別用事もなかったからだ。

「そうだな、たまにはおばさんに挨拶しないとな」

幼いときから、お世話になってるし、半年以上も顔を合わせてなかったからな。

「じゃあ、アレ買わないとね」

アレというのは、スパイシーな調味料のことだ。

水城の家系は全員甘党だ。比べて俺は辛党だ。特にカレーは辛くなくてはカレーじゃない、というのが俺の持論だ。

「でも、信介のカレーを食べてるときの顔はすごいよ」

笑いながら、カゴに次々と材料を入れていく。

「汗をダラダラ流して、顔を真っ赤にさせて」

本当に楽しそうに笑う。カレーを食ってる時の自分の姿なんて見たことはないが、そんなに面白いものなのか。

確かに、カレーを食べ終わったらシャツがびっしりぬれてるなんてこともあつたが。

…そういえば、水城は甘い物好きだが、アイツも甘いものが好きなんだろうか。

ふと、アイツが別れ際に言った「甘い物」を今度持って行かないとな。

「なあ、凜、最近食べて美味かった甘い物ってなんだ」

参考までに凜に聞いてみた。

「信介が甘い物に興味を持つなんて珍しいね」

たしかに、自分が甘いものを食べてる姿なんて想像できない。

「そうね、部活帰りに友達と寄ったケーキ屋が美味しかったな」

凜が口頭で説明してくれるが、全部は覚えきれなかった。

後で、凜の家で場所と凜が美味しいと言ったケーキをメモしてもらおう。

「でも、なんでそんなこと聞くの？」

「ああ、友が入院したんでな、その見舞い品に甘いものがいって言ったんでな」

「そうなんだ」

それで、この件については終了。色々と聞かれて、面倒ごとになるのは避けたいからな。

「お邪魔します」

「ただいま」

それぞれの挨拶をして、凜の家にお邪魔する。

「おかえりなさい、凜ちゃん。誰、連れてきたの？」

凜のおばさんの水城^{みずき}縁^{ゆかり}さんだ。

今年で3×歳らしい。どうみても20代にしかみえない！

凜のおじさんである悠二さんは家にはあまり帰って来ない。

単身赴任って訳でもないらしいが、小学校のころに会って以来、おじさんには会ってない。

年末や連休などが取れたときは戻ってくるらしい。

おじさんとおばさんが出会った馴れ初めを聞くと2、3時間は離してもらえない。

コレ、中学生の俺の実体験。

「あら、信介君じゃない！」

「久しぶりです。おばさん」

見た目は最後に会ってから、全く変わってない。

「荷物持ち、手伝ってもらっちゃったから、お礼に晩ご飯を食べて

もらおうと思つて」

「あら、そうなの」

縁おばさんは嬉しそうに微笑みかけてくれた。

おばさんに案内されて、居間に入る。俺と凜は持っていた荷物を置いた。

おばさんが料理に使うものだけを残して、残りは冷蔵庫やお菓子専用の棚に直した。

時計を見てみると『19:30』の表示。今日は帰るのが遅くなりそうだ。

「じゃあ、少し待っててね」

そういつておばさんはテキパキと料理の準備をし始めた。

俺はその間、凜と雑談を交わした。成績のこと、凜の部活動のこと、最近見た番組や聞いた音楽。

弟君の貴志君は、どうやら友達の家で食事をしてくるらしいので、入れ違いのような形で俺が訪れた形だ。

そつえば、貴志君ともずいぶんと話してないな。

たまに、学校の帰りにみかけることはあるけど。

久しぶりに訪れた凜の家は最後に来たときとそんなに変わらない。変わったと言えば、カーテンの柄とテレビ位だ。

凜の家は2階建てのわりと広めの家だ。凜と弟とおじさんとおばさんの4人暮らし。4人暮らしでもまだ少し大きいと俺は思う。

(…まあ俺の家も大きいけど、大きいだけだな)

凜は着替えるため自室に行き、もうすぐ調理が終わりそうなので、頃合を見て皿を出そうと席を立つ。

昔はよく遊びに来たり、飯をご馳走になったんだから皿の場所ぐらいはわかるからな。

サラダ用の大皿とカレー用の皿を3皿。

それぞれにカレーを注ぎ、おばさんがサラダを大皿に盛り付ける。自分の皿を手前に、向かいにおばさんと凜の皿を置き、真ん中に大皿を置く。

凜が戻ってきたところでそれぞれ席につき、それではいただきます、しよう、とおばさん。

いただきます、と俺達。

まず、最初に目の前にあるスパイシーな香辛料の小瓶、4分の1ほどをカレーにかける。

凜もおばさんも慣れた様子で、ギコチナク笑いかける。

食事も終わり、三人で雑談をした。主に俺がおばさんに高校生活について話して、それを凜が茶化す。それを楽しそうに聞くおばさん。

久しぶりに訪れた水城家は暖かった。

水城凜（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

できれば、感想やご意見などがありましたら。おっしゃってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0750q/>

ミエルミライ

2011年1月15日20時25分発行